

五感の学校

アーティストと住民の共同作業で地域交流を活性化



先生はアーティスト、教室は街そのもの。住民がアーティストと一緒に、アートを作り、体験し、交流する、柏の葉キャンパスシティ独自のアートプロジェクトが「五感の学校」です。街全体が五感を刺激する学びの場となるこのプロジェクト。街のあちこちで行われるアートイベントやワークショップが、活気あふれる地域コミュニティを生み出しています。

地域交流の仕掛け

石膏で作られた大小様々な「手」が無数に埋め込まれた壁。これ、実は柏の葉キャンパス駅近くのマンション「パークシティ柏の葉キャンパス二番街」の公共スペースに設置されたクライミングウォール。五感の学校に参加した住民が手型をとり、アーティスト・大巻伸嗣さんと一緒にクライミングホールドを作りました。このクライミングウォールを登ると、住民同士が「握手」することになる、なんともユニークなアート作品です。

五感の学校では、大人から子どもまで一緒に楽しめる様々なアート体験企画がプログラムとして提供されています。柏の葉アーバンデザインセンター(UDCK)のディレクターで五感の学校事務局の小山田裕彦は、その役割を「地域住民が交流する仕掛け」とであると説きます。

都市開発が進行中で新しい住民が次々と増えていく柏の葉。マンションや道路など着々とハードの建設が進む中、住民交流やコミュニティ作りなどソフトの街づくりを疎かにすると、「隣人知らず」の

ニュータウンになってしまう危険性も。

そこで五感の学校が提示した仕掛けは「公共空間を活用した目に見えるアートコミュニケーション」。街中でアーティストが活動していると「何をやっているのだろう?」と足を止めてしまうもの。誰でも参加できる場で周りの目を引くアート活動を展開することで、地域住民を次々と巻き込み、活気のある交流を生み出してきました。

子どもが街に落書き

五感の学校がはじめたのは2006年。「街のにおいを嗅ぎながら散歩しよう」「ペットボトルでクリスマスイルミネーションを作ろう」。アーティストが考える個性いっぱいのプログラムは6年間で20種類以上にのぼりました。

そのひとつ、「らくがきワークショップ」は駅前施設の窓ガラスや壁に落書きして楽しもうという、なんとも大胆な企画です。子どもたちに普段は禁止されていることをあえてやらせることで、常識にとらわれない自由な創造力を養います。もちろん使用するのは水性ペン、ワークショップ後はきれいに洗い落とします。

イラストレーターの高橋信雅さんとともに描く落書きは、もはや彩り鮮やかなアート作品。普段見慣れない街の光景に、回りの人は興味津々となります。たまたま通りかかり思わず写真を撮ったという30代の女性は、「子どもの個性をこれほど尊重してくれるイベントは他の街にないのでは」と驚いていました。



住民の「手」から作ったクライミングホールド。(撮影 山本真人)



車にも落書き。あえてルールを破る体験に恐々ながら夢中。

五感の学校

参加者から企画者へ

「住民の発案による新しい企画が次々生まれている」(UDCK・小山田ディレクター)というように、五感の学校では今、受け身ではなく主体的にアートと関わる参加住民が増えています。

駅前マンションに住む和田富美子さんもその一人。柏の葉に住んで10年。2007年から五感の学校に参加し、現在では親子で企画や運営に加わっています。

五感の学校のプログラムのひとつである、柏の葉キャンパス駅前のアートな定期市「マルシェコロール」。この市場限定で販売されるご当地グルメの開発に、和田さんは関わりました。完成したものは、地元食材をふんだんに使ったホットドッグ「柏の葉ドッグ」。地元食材を知り尽くした近所の仲間たちと知恵を出しあい、レシピを考案しました。

街の発展とともに生まれる新しい出会いや交流が楽しみという和田さん。「新しく引っ越してきた人とコミュニケーションが広がった。もっと多くの人にこの楽しさを味わってもらうために、何か力になれば」とはりぎりります。

日本最大級のアートネットワーク

アートの力で街に交流と活気を生み出してきた五感の学校。この魅力を全国に発信し各地から人を呼び込むために、ある取り組みが進んでいます。

それが、2011年11月に発足した「Art Round East (ARE)」。五感の学校のほか、つくばエクスプレスや常磐線沿線で活動する26のアート団体が手を結んだ広域アートネットワークです。

地域に根付いた各団体の取り組みは、それぞれ特徴的なものばかりですが、規模は決して大きくありません。それを束ねて沿線一帯でまとめ上げることで、国内有数のアート先進エリアにしていこうという狙いです。沿線界隈を周遊して各地域の展示会やイベントを楽しめる「合同芸術祭」などの企画があがっています。

「ここに来れば何か新しいことができる、アーティストにとって絶好の活動拠点」。そんな評判が徐々に広まっているようで、「ここ数カ月で、複数のアーティストが柏の葉に移り住んできた」(UDCK・小山田ディレクター)というように、住民として定住するアーティストも増えています。



名物「柏の葉ドッグ」。パンには柏名産のほうれんそうを練り込んだオリジナリティ溢れるご当地グルメ。



映像クリエイター集団「トーチカ」は住民と一緒に太陽の反射光で空中に絵を描くアート作品を制作。

アーティストとのご近所づきあいが当たり前のように生まれる、知的でオシャレな街へ。アートを活用した街づくりの可能性は広がります。

五感の学校の詳しいプログラムはHPなどで確認を。

■五感の学校

〈<http://gokan-gakkou.jp/forum/>〉



小山田 裕彦 氏
柏の葉アーバンデザインセンター ディレクター

キーパーソン・トーク

従来のパブリックアートといえば、アーティストが制作した彫刻やモニュメントが道端に置かれているだけ。アーティストと街との関わりは「作って終わり」でした。残念ながら、住民から見向きもされず寂れていくパブリックアートが全国各地に溢れています。

柏の葉では、アーティストと住民が一緒になって作品を作り上げます。制作過程からアートは始まっているのです。アーティストの一方的な作品ではなく住民参加のアートだからこそ、地域生活に溶け込み、街に潤いと豊かな交流を生み出します。

震災の影響もあり五感の学校を開催できなかった時期、「何でやらないの?」と子どもから落胆の声が出ました。プロジェクトが街に定着したこと

を実感し、嬉しくもあり、また頑張らねばと気持ち引き締まった瞬間でした。

第1回からすべてのプログラムに参加している子もいます。当時は小学生だったけれども現在は中学生。今後はOBとして企画や運営に参加してくれるそうです。

この街に関わる人は、挑戦を受け入れる寛容性に満ちています。五感の学校を続けられた最大の理由がここにあります。一般的に新しいことを始める場合、失敗を恐れて「面倒なことにならないか」と不安の声があがるもの。でも、「常に失敗が許されない」という街では、生活に潤いが失われ肩が凝ってしまいます。

新しい取り組み、ワクワクする挑戦、そんな活動に積極的に住民が参加してくるこの街の文化を、今後も大切に育てていきたいです。それが、街の豊かさになると信じています。

□編集後記□

インタビューにご協力いただいた和田さんの息子さんは来年から中学生。受験では、五感の学校での活動を紹介し、見事合格されたそう! 今後の活躍に期待です。(丸浜)

●このニュースレターに関するお問い合わせ先

柏の葉アーバンデザインセンター (UDCK) 広報担当 小林、蛭川、丸浜
〒277-0871 千葉県柏市若葉184-1柏の葉キャンパス149街区13
TEL 04-7140-9686 FAX 04-7140-9688
E-MAIL ma-kobayashi@udck.jp WEB <http://www.udck.jp>

柏の葉
アーバン
デザイン
センター

UDCK